「ピアノレッスン、その後」　作　大西　伸子

キャスト表

町田貴子

佐々木達哉

三月。
春の雨がしっとりと降る午後三時。
大手音楽教室のレッスン室の前。

レッスンの順番を待つ生徒用の簡素な椅子が二脚置かれている。
壁には「樋渡美智子ピアノリサイタル」のポスターが堂々と貼られている。

町田貴子が座っている。
シンプルだが上品な恰好。経済的に余裕があることを伺わせる雰囲気。
重い防音ドアの向こうから、貴子の娘、さくら（五歳）の弾く拙いピアノと先生のピアノの音が交互に聞こえてくる。

貴子、見るともなしに音楽教室の生徒募集要項などが書かれているパンフレットを見ている。

佐々木達哉登場。
樋渡美智子のポスターの前に立ち止まって眺める。
しばらく眺めて去ろうとしたところで、貴子に声をかけられる。

貴子　先生？　佐々木先生、ですよね。
佐々木　君は？
貴子　やっぱり先生だ。長野です。長野貴子。今は、町田ですけれど。
佐々木　長野君？
貴子　はい。ご無沙汰しております。
佐々木　あ、ああ。
貴子　何年ぶりかしら。
佐々木　随分経つね。
貴子　私がまだ高校生の時以来です。
佐々木　そうか。
貴子　二十年近く、でしょうか。
佐々木　そんなになるかな。
貴子　はい。
佐々木　大人になったね。みちがえたよ。
貴子　そうでしょうか。先生はお変わりないですね。
佐々木　いや、随分年を取ったよ。

貴子　そんなことないですよ。すぐ分かりました。佐々木先生だって。
佐々木　そう。
貴子　先生はここで何を？
佐々木　教えてるんだよ。ここで。
貴子　（驚いて）ここで？
佐々木　そうだよ。
貴子　『中野教室』はどうされたんですか？
佐々木　勿論、そこでも教えてるよ。ここと並行してね。
貴子　そうなんですか。
佐々木　うん。
貴子　あ、もしかして『Sメソッド』の関係でしょうか？
佐々木　ここではクラスもあるからね。
貴子　御本、拝見しました。先生の『Sメソッド』の本。素晴らしいですね。
佐々木　読んでくれたのか。ありがとう。
貴子　先生、お時間は？
佐々木　いや、大丈夫だよ。
貴子　なら、少し話しませんか？　私、今、娘の体験レッスン中で（ドアの方を見て）終わるまで時間を持て余しちゃって。
佐々木　（ドアのほうを見て）ああ。

二人、椅子に腰かける。

貴子　もう、さくら、あ、娘がピアノを習いたいって言った途端、主人が張り切っちゃって。
佐々木　へえ。
貴子　まだ、習うかどうか分からないのに、ピアノ買ったんですよ。
佐々木　え？
貴子　アップライトの割といい値段がするの。
佐々木　君は・・・
貴子　（遮るように）どうせならたくさんリズムが出たり、色々な音があるのがいいって言うものだから、私、必死で止めたんですよ。そんなの必要ないからって。
佐々木　うん。
貴子　もう、何にも分からないくせに、せっかくだから一番高いのを買おうって。でも、さすがにグランドピアノはね。

ふいに、ドアの向こうから、さくらが弾くはっきりとしたピアノの音が聞こえてくる。

佐々木　なかなか上手だね。
貴子　え？
佐々木　タッチが力強い。さすが君の子だね。
貴子　ええ？　レッスンするのは今日が初めてですよ。
佐々木　いや、分かるよ。よく分かる。
貴子　そんな。
佐々木　君の弾く音によく似ている。
貴子　そんなこと（笑って）覚えてらっしゃるんですか？
佐々木　当たり前じゃないか。
貴子　まさか。
佐々木　それで、君は今、どうしてるんだい？
貴子　結婚してつつがなく暮らしておりますよ。
佐々木　そう。
貴子　主人と子供の三人暮らしです。
佐々木　それで・・・
貴子　（遮って）先生は？　御本も出されてご活躍ですね。
佐々木　実は、本のおかげで近々ロンドンに行くことになってね。
貴子　ロンドン！
佐々木　向こうであの本が評価されてるらしい。
貴子　素晴らしいですね！
佐々木　ありがとう。
貴子　いつ出発なんですか？
佐々木　来週。実は、ここで教えるのも今日で最後なんだ。
貴子　そうなんですね。しばらく行かれるんですか？
佐々木　まあね。
貴子　そんな時にお会いできるとはね。
佐々木　全く思いもよらなかったよ、君に会えるとは。
貴子　（振り返って）それも美智子のポスターの前で。
佐々木　（ポスターを見て）樋渡君か。
貴子　立派になりましたね。
佐々木　そうだね。
貴子　一体、どこで違っちゃったのかしら。
佐々木　君は、もうピアノは弾いてないのか？
貴子　私なんか、あれきりです。
佐々木　そうなのか？

貴子　私、元々そんなにピアノが好きじゃなかったんです。
佐々木　好きじゃなかった？
貴子　よく分からないままレッスンに連れていかれて、ずっと親のいいなりで弾いてただけです。自分の意思なんてなかったんです。
佐々木　自分の意思がなかったら、あれほど弾けるようにはならないよ。
貴子　あれほどって。たいしたことないの、先生が一番ご存じじゃないですか。
佐々木　何言ってるんだ。
貴子　そりゃあ、小学生の頃はコンクールで優勝したりしましたけど、それだけだったじゃないですか。
佐々木　いや、それだけってことはなかったよ。
貴子　まあ、趣味で弾くにはあのレベルで十分かもしれませんけど。
佐々木　いや、趣味なんてレベルじゃなかった。君は本気だったろう？
貴子　・・・
佐々木　あれ以来、全く弾いてないのか？
貴子　はい。
佐々木　もう、弾かないのか？
貴子　はい。
佐々木　勿体ないよ。
貴子　何をおっしゃるんですか？
佐々木　僕がどれほど君のピアノを買っていたか・・・
貴子　ええ？　先生に褒められた思い出、ないですよ。
佐々木　君ならもっとできると思ってたからだよ。厳しかったです。
貴子　そんなこと今更。
佐々木　なんてことだ、わかってなかったのか。
貴子　え？
佐々木　どうしてだ、君は強い子だったじゃないか。レッスンで一度も泣いたことはないし、注意すれば、次の時は必ず問題点が改善されていた。
貴子　負けず嫌いだったんです。それだけです。
佐々木　いや、素晴らしいことだよ。
貴子　そうやって、あの頃のご自身を肯定なさるんですね。
佐々木　え？
貴子　それが今は、「どんな子供にも音楽の才能は必ずある」ですか。「誰にでも楽しく音楽を」・・・本当にびっくりしました。
佐々木　時代が変わったんだよ。今までと同じような教え方だけではやっていけなくなった。

貴子　「君のようなガサツで感性のない人間はピアノに触れる資格はない」と言ってらっしゃったのに。
佐々木　それでも君はついてきてくれたじゃないか。
貴子　ついていけてませんでした。
佐々木　しかし、君はただの一度だってレッスンを休まなかったじゃないか。突然、いなくなるまでは。
貴子　親にレッスンに行かされてたからです。いい子でいたかったから親に逆らうことなんて考えられなかったんです。
佐々木　後悔しているのか？
貴子　後悔もなにも、あの時はあの生き方しか知らなかったんです。
佐々木　君は素晴らしいピアニストになると思ってたよ。
　僕の教えた生徒の中でも断トツの激しい個性があった。
貴子　そんなこと、言って下さらなったじゃないですか。ただの一度も。
佐々木　分かってると思ってたんだ。自分で。
貴子　そんなこと！
　ほんの子供の私に分かるわけないじゃないですか。
佐々木　そんなものだったのか。
貴子　そんなものって。
佐々木　いや、ちょっと君を買いかぶりすぎてたのかな。
貴子　え？
佐々木　離れてしまったから余計にね。
　自分でどれほど貴重な宝物を持っているのか気づいてなかったのか。
　だから、簡単に手放してしまったんだね。その程度の才能だったんだ。
貴子　そんな、だって、それは先生のせいです。
佐々木　僕の？
貴子　そうです。私、先生の指導のせいでピアノがトラウマになったんです。
佐々木　僕は君のピアノを誰よりも認めてたよ。だから、君には厳しくしたんだ。
貴子　分かりませんでした、私には。
　おっしゃってくださらなければ、伝わりません。私は、先生、誰よりもあなたに認められたかったんです。
佐々木　僕に認められなければ弾かない、なんてそんなの本物じゃない。
貴子　でも、子供の頃なんて、何を指標にして弾けばいいのか分からないじゃないですか。
　誰でもそうじゃないですか？
佐々木　あの頃教えた生徒の中には、君よりできなくてもピアニストになった者はいる。
　結局、君は君自身の意思でピアノから逃げたんだ。自分の弱さを僕のせいにしてるだけだ。

貴子、ふと振り返って「樋渡美智子」のポスターを見る。

貴子　そうですね。美智子は本当に立派にやってますね。

佐々木　樋渡美智子は、あの頃はとても想像がつかなかったくらいに大きくなっている。

貴子　本当にどこで違っちゃったのかしら。『中野教室』に入ったのは、ほぼ同時期だったのに。

佐々木　彼女の今の成功は僕にも想像できなかった。

貴子　いつも、私の前の時間が美智子だったから、彼女が泣いてレッスン室から出てきたのをよく覚えてます。

佐々木　来た頃はまるで駄目だったね。何か言う気もしなかったよ。

貴子　どうして『中野教室』に入れたのか不思議なくらい。

佐々木　君はよく面倒見てたじゃないか。クリスマスコンサートでは毎年連弾してたし。

貴子　あの子、いつも私のレッスンが終わるまで待ってるんです。「あなたみたいに弾きたいんだ」って言われて。

佐々木　あの連弾は良かったよ。

貴子　遊びみたいなもんでんですよ。一緒に弾いてたのはディズニーとかアニメの曲だったし。

佐々木　いや、樋渡君も良かったけど、君もセカンドでよく彼女の魅力を引き出していた。彼女がピアニストになれたのは君の献身もあるんじゃないか？

貴子　コンサートのたびに、今でも招待券をくれるんです。

佐々木　よく行くのかい？

貴子　行ったことはありません。

佐々木　そう。でもせめて、彼女の才能を引き出せたことは、もっと誇っていいんじゃないかな。僕やご両親の協力だけではやれなかったことを君はやったんだ。

貴子　私、ずっと美智子を軽蔑していました。

佐々木　え？

貴子　ピアノを習ってた頃はいつも自分の才能に不安でしょうがなかったんです。だから、もっとダメそうな美智子を見てると自信が持てたんです。少なくともこの子よりましだからって。最低ですよね。

佐々木、何か言おうとするが、言葉が見つからない。

貴子　安心できたんです。弱くて何もできない美智子と一緒にいると。

間

貴子　私、ひどいことをしょっちゅう言ってたと思います。あの子、何言っても笑ってたから。
佐々木　彼女はひどいこと言われたなんて思ってないんじゃないかな。
　僕は少なくとも、君に対する感謝の言葉しか聞いたことがない。
貴子　ええ、そうですね。きっと本当にそうなんだと思います。でも、いつの間にか彼女に追いこされて、遠く手の届かないところに行ってしまった。

間

貴子　覚えてらっしゃいませんか？　あの時のコンクール。
佐々木　あの時の？
貴子　美智子が初めて優勝した時の。私たちが高校二年だった時。
佐々木　ああ、よく覚えてるよ。
貴子　今度こそと思って私は必死でした。もう、随分入賞から遠ざかっていたし。
佐々木　そうだったね。
貴子　でも、美智子の演奏は驚異的でした。私の努力なんて何だったんだろうって思うくらい。
佐々木　君は君で成長したじゃないか。
貴子　そんなの比較にならないです。次元が違う感じ。
佐々木　次元、ね。
貴子　あんな音は私には出せない。そう思いました。美智子の音には全て物語があったじゃないですか。聞いている人の気持ちを揺さぶって離さないような。
佐々木　確かに。十七歳とは思えないような深い解釈だった。
貴子　私は誰かに勝てるような演奏をすることしか考えてなかったんです。それなのに、美智子はいつの間にか・・・私は・・・恥ずかしくなったんです。
佐々木　だから、君はやめたのか？
貴子　私は絶対あんな音は出せない、あんな風には弾けない。多分、美智子のようなピアニストにはなれない。
　なら、ピアノを続けても意味がないって思ったんです。
佐々木　それで、突然来なくなってしまったのか。奨励賞だってもらったのに。
貴子　そんなの何の意味もありません。
佐々木　君は極端だ。
　僕だけでなく、コンクールでもある程度認められてたんだ。そこまで行けない者だって大勢いる。樋渡君とはまるっきり持ってる個性も違う。君は君なりの音楽を目指せば良かったんだ。
貴子　私なりの音楽？

佐々木　そうだ。
貴子　世界的なピアニストにはなれない、と分かっても？
佐々木　いや、君なら十分に素質はあったよ。しかし、そうならなくとも自分の持ってる才能や芸術といかに向き合うか、そういうことのほうが大事なんじゃないかな。
貴子　よくもそんなきれいごとを。
佐々木　え？
貴子　百かゼロか、そういうところで戦ってきたんじゃないですか。百の存在になれないのだとしたら、何もしないほうが遥かに潔いじゃありませんか。
佐々木　それは違うよ。
貴子　優勝できなければ今までやってきたことは何の意味もないって、奨励賞じゃ何の意味もないって、それくらいじゃなければ私は何のために厳しいレッスンに耐えてきたんですか？
佐々木　限界まで自分と向き合わせる、そういうところでもっと君の才能が引き出せる、そう考えていた。
貴子　結局、そうはならなかったじゃないですか。
佐々木　そうだ。そうはならなかった。

少し間。

貴子　どうして、「誰もが音楽家になれる」、『Sメソッド』なんですか？

佐々木、貴子のほうを見る。

貴子　私は何も『Sメソッド』を否定するわけじゃないんです。
でも、先生が先導して「楽しくピアノを」なんて言ってらっしゃる姿を見ると、あの頃厳しいレッスンに耐えてきた私は何だったんだろう、って思わずにはいられないんです。
佐々木　勿論、ああいうレッスンを否定してるわけじゃない。地道な訓練に耐え抜いたあの頃の生徒は皆、素晴らしいと思う。それに、あの頃はああいう指導法しか僕は知らなかった。
貴子　・・・
佐々木　君がいなくなった後、すぐに中野先生が亡くなられてね。
貴子　ああ。
佐々木　中野先生は指導者としても本当に素晴らしかった。
貴子　ええ。
佐々木　結局、あの教室は中野先生の教室だったんだ。先生の名前があるから優秀な生徒がたくさん通って来てたんだよ。

貴子　そんなことないです。先生だって、
佐々木　いや、そうなんだ。実際、亡くなられてからは一気に目減りした。だから、僕も他の教室で教えざるを得ない状況になったんだ。
貴子　そうだったんですか。
佐々木　最初は驚いたよ。
貴子　え？
佐々木　とにかくレッスンにならない子が多くてね。練習してこない、ならまだいいほうだよ。来てもいつまでも話し続ける子、何年続けても全く進歩しない子。いかに「中野教室」に来る子が優秀だったかを思い知らされたよ。
貴子　・・・
佐々木　クレームも随分言われたな。ちょっと厳しく言うとすぐにやめられてしまってね。
貴子　そうですね。今の時代は。
佐々木　それで、どうしようもなく追い詰められていた時に、ここの教室の先生に『Sメソッド』の原点となる指導法を教えてもらったんだ。それにアレンジを加えて自分の指導法を確立した。
貴子　よく受け入れられましたね。
佐々木　そりゃあ、最初はどうかと思ったよ。「ハノン」をやって「ツエルニー」をやって、地道な基礎の上に高度な技術が身に付くんだ、と信じて疑ってなかったからね。まずは、虹や星を見て感性を磨いて、などと言われても、どうにも受け入れがたかった。
貴子　本で読みました。虹が出た時は、レッスンをやめてそれを見に行くんですってね。それだけで終わる日もあるとか。私には想像がつきませんけど。
佐々木　その通りだよ。僕だってそんなレッスン、受け入れがたかったよ。それでもメソッドに沿って教えてると、本当にどうしようもない、ピアノにも音楽にも興味がないと思ってた不真面目な子が突然、目の覚めるような美しい音を出すことだってあるんだ。あまりにも大勢の子が音楽の楽しさに気づくことなく、最初の、全く基礎の段階で躓いてしまう。それは、本当に勿体ないことなんだと、何度も何度も痛感した。
貴子　でも、それじゃあ基礎の面白みのない練習を一生懸命頑張る子はどうなるんですか？
佐々木　いや、何もそういう子を否定してるわけじゃない。もっとその前の段階だよ。「ドレミ」の音が鍵盤のどの位置なのかすら、なかなか覚えられないような段階でそれで嫌になってしまうような。
貴子　私は、一度教えられたことができなかったら、ほんの小さい頃でも容赦なく怒鳴られました。
佐々木　君は、それでも続けられたけどそういう子ばかりじゃないんだよ。教えようとしたらすぐにふざけてしまったり、萎縮したりするような子だっているんだ。

というか、そういう子が大半なんだ。
貴子　ええ。
佐々木　そういう子供でもね、教室の前に咲いてる桜の花からどんな音が聞こえてくるのか、雨の後の虹を見たときどんなメロディが浮かんでくるのか。そんな感性を磨きながらレッスンをした途端に生き生きし始めたんだ。
貴子　でも、それは・・・
佐々木　積極的に作曲を始めたり、流行りの音楽を楽譜のないところから練習し始めた子もいる。僕も今の音楽にはかなり詳しくなったよ。
貴子　でも、実際それでプロになれる子なんて一握りでしょう？　作曲だってでたらめに作ってるうちは楽しいかもしれませんが、そんな風できちんとした理論を勉強できるのかしら。
佐々木　君は、どうしても『Sメソッド』には否定的なんだね。
貴子　私は、辛いことを乗り越える訓練を子供の頃に「する」か「しない」かでは、大人になった時の人生に大きく影響してくると思うんです。
嫌なことを避けて通るような生き方ってどうなんでしょう。
佐々木　君は僕のレッスンでトラウマになったんじゃなかったのかな？
貴子　それは、そうですけれど。
佐々木　僕が最初から『Sメソッド』で教えてたら、ピアノを続けてた？
貴子　・・・
佐々木　これからもう一度弾いてみればいい。
貴子　だから、今から弾いても。
佐々木　樋渡美智子のようにはなれない？
貴子　それは・・・
佐々木　どんな形でもいいじゃないか。何も世界に称賛されるピアニストになることだけが立派な人生じゃない。身近な人を喜ばせるだけでも、いや、自分のためにだけでだって構わない。
きっとピアノを弾くことで君の人生が豊かになる。
貴子　優しい主人がいて、素直な子供がいて、そこそこゆとりのある生活ができて、それ以上、何を望むんですか？
佐々木　・・・
貴子　自分に満足できない人というのは、能力以上のものを求めすぎて、分相応に生きられない人のことです。
ピアノを弾いてる頃の自分がそうでした。できもしないことを求め続けて、血みどろにあがいてとても不幸で醜かった。
佐々木　そんな風には見えなかったよ。いつもギラギラして、誰にも負けない、という気迫があって、たまらないくらいの生命力と美しさを感じた。

貴子　私は今が一番幸せです。
佐々木　今の君は生命力が根こそぎ抜き取られた抜け殻のように見える。
貴子　抜け殻だなんて。そんなはずありません！

少し間。

佐々木　いや、もうそれで君が十分満足してる、と言うなら僕が言うことは何もないよ。
（立ち上がり）では、元気で。
貴子　（佐々木の背に向かって）先生はどうなんですか？

佐々木、立ち止まる。

貴子　『Sメソッド』で本を書いて認められて、ロンドンにも行けて、それで幸せなんですか？

佐々木、そのまま動かない。

貴子　先生の求めてる成功ってそういうものだったんですか？

佐々木、答えない。

貴子　先生はもっと自分の弾くピアノを追求してる人だと思ってました。誰が何と言おうと自分の求めるピアノを弾く。そういう方だと思ってました・・・
でも、違ったんですね。『Sメソッド』で認められたから、成功と名誉も手に入ったから、満足して演奏会もやらない、ピアノを弾かない。
佐々木　どう思われても構わない。君の言ってることは理想だ。
貴子　先生がただの主婦になってしまった私にがっかりしたように、私も先生にがっかりしてるんです。もう弾かないんですか？
佐々木　僕はもう弾かないよ。
貴子　私にピアノを弾けとおっしゃったじゃないですか。その前にまず、ご自身が弾くべきじゃないでしょうか。
佐々木　僕はもう、衰えた。
貴子　そんなこと関係ないです。先生は「私なりの音楽を目指せ」っておっしゃったじゃないですか。私は、先生のピアノが聞きたいです。
佐々木　僕のピアノ？
中野先生のピアノが習いたくて、『中野教室』に来たんじゃなかったのか？

貴子　私は先生のピアノのほうが好きでした。尖ってて誰も寄せ付けない、それでいて人の心を離さない、そんなピアノが。
佐々木　もう、そんなピアノは弾けない。
貴子　残念です。昔の先生はすっかりいなくなってしまわれたんですね。美智子だってきっと私と同じ思いです。
佐々木　樋渡君が？
貴子　私、美智子の載ってる記事には全部目を通しているんです。
美智子は先生が『Sメソッド』の本を出した時から一度も先生のことを語らなくなりました。美智子もガッカリしてるから、だから何も言わないんです。
佐々木　全然あきらめてないじゃないか？
貴子　え？
佐々木　本当は弾きたいんじゃないかな、ピアノ。
貴子　私はもう、自分にできないことをみっともなくあがいて求め続けるようなそういうかっこ悪い姿を見せて生きたくないんです。
佐々木　だからそうやって一生懸命幸せな振りをしてる。
貴子　そんな。
佐々木　君の言う通りだ。
貴子　え？
佐々木　僕はね、中野先生のようになりたかった。
きらびやかな存在になりたかったし、俗な名誉だって欲しかった。
貴子　先生は先生のままで良かったのに。
佐々木　そうだね。中野先生にもよく言われたよ。あの柔らかい笑顔でね。何度も何度もそう言ってもらってたのに、僕は全く分かってなかったんだな。それでも、先生は伝えようとしてくれた・・・
僕もそうするべきだった。申し訳なかったよ。
君にあの頃、しっかりと伝えるべきだった。君の演奏をどれほど好きかということを。どれだけ君のピアノに対する真摯な姿勢に対して尊敬しているか。
君はまだまだ子供だったのに。せめて、君がレッスンに来なくなった時に、そうやって声をかけるべきだったんだ。
貴子　もうどうにもならないじゃないですか。
佐々木　その通りだ。どうにもならない。

長い沈黙

貴子　私、先生にずっと会いたかったのかもしれません。

佐々木、貴子の方を見る。

貴子　多分、ピアノをやめてからずっと。
佐々木　うん。
貴子　私、ずっと自分がピアノを続けられなかったのは先生のせいだと思ってたから。
佐々木　クレームでも言いたかったのか？
貴子　そんな生易しいものじゃありません。会って、先生を殺したかった。
佐々木　え？
貴子　本気で言ってるんですよ。ずっとどこかでそう思って・・・
佐々木　殺せばいいよ。
貴子　え？
佐々木　それで君が再びピアノに戻ってくれて、また美しい音楽がひとつ生まれるのなら、
　僕は本望だ。

貴子、佐々木のことを真剣に見る。

貴子　（溜息をついて）もう十分です。
佐々木　娘さんをピアノ教室に連れてきてきたのは、どうしてなんだい？
貴子　証明したかったのかもしれません。娘が弾いても、家にピアノがあっても、私は大丈
　夫だって。
佐々木　そうか。
貴子　結局、私は、自分がピアノから、自分の弱さから逃げた過去と向き合いたくなかった
　だけなんですね。先生と会うことでそんな自分と向き合うのが怖かったんです。
佐々木・・・
貴子　でも、怖いことばかりじゃなかったです。
佐々木　え？
貴子　今日先生に会えて良かったです。ありがとうございました。

間

佐々木　僕は自分の力で発展させた『Sメソッド』を広め続ける。僕はそのことを誇りに思
　っているから・・・
　だけど、僕は、今ここで君に約束する。
　僕は、再び自分のピアノを追求する。自分の衰えと向き合いながら、決して逃げない。
貴子　先生、私は・・・
佐々木　元気で。会えて良かったよ。

貴子　先生も。

佐々木、去る。

貴子、そのまま椅子に座り込む。
教室からレッスン終わりのカデンツが聞こえる。
立ち上がってさくらを迎えなければならない、と思う。
しかし、貴子はその場を動かず、佐々木の去ったほうを見ている。

幕